

〈学術論文〉

目取真俊「水滴」における時間・記憶・身体

友田義行 信州大学学術研究院教育学系

キーワード：日本近代文学、沖縄文学、文学教材、戦争

一、はじめに

第二次世界大戦末期の一九四五年三月二三日、米軍は沖縄本島への猛攻を開始した。上陸部隊約十八万八千人、艦船約千五百隻、後方支援部隊を含む総勢は約五十四万八千人にのぼる最大規模の編成であった。対する沖縄守備軍は動員した一般住民を含めても約十一万人の劣勢である。米軍は三月二十六日に慶良間諸島へ、四月一日には読谷飛行場や嘉手納飛行場が位置する読谷・北谷海岸に上陸した。守備軍は水際作戦を避け、沖縄本島の中部にあたる首里地区の地下陣地や自然壕に主力を配置し、持久戦に持ち込んだ。しかし、大本営は沖縄を楯に本土決戦を九月頃まで引き延ばそうと画策しており、軍中央から見た沖縄は時間稼ぎの捨て石に過ぎなかった^一。

一 石原昌家・大城将保・保坂廣志・松永勝利『争点・沖縄戦の記憶』社会評論社、二〇〇二年三月、一八～二〇頁

圧倒的な戦力差にも拘わらず、六月末まで守備軍が頑強に抵抗を続けられたのは、砲爆撃に耐えられる無数の地下洞窟（ガマ）の存在と、陸海空における全面的な肉弾特攻作戦、そして数十万人に及ぶ一般住民の戦力化があったからであると言われる^二。沖縄戦では防衛隊や学徒隊、護郷隊といった名称で、少年少女から老人に至るまで、多くの住民が戦場に駆り出された^三。学徒だけでも沖縄全体では二千数百名が動員され、男子八七三名、女子一八八名の計一〇六一名が犠牲となっている^四。

沖縄戦に動員された学徒の中には、本土の兵隊から命令を受けて、雨と降る艦砲射撃の中を壕から壕へ伝令に駆け渡った者もあった。また、傷病兵のために危険を冒して壕の外へ水や食糧を調達に出掛けた者もあった。そうした極限の戦場体験は、当事者による貴重な証言によって記録され伝えられているとは言え、語り得ない膨大な領域を残すことになる。たとえば、爆撃で重症を負った仲間を、自らが生き延びるために置き去りにし、そのことを誰にも話せず、記憶を封印して戦後を生き延びていくことになった人々や、そうした人々を生み出した戦争のことをどのよ

二 同前

三 一九三八年制定の「国家総動員法」に基づいて一九三九年に公布・施行された「国民徴用令」において、戦争遂行のための総動員業務に国民を動員する体制が築かれた。ただ、沖縄戦ではこうした法的根拠から逸脱した動員も多く見られたという。（天田昌秀『沖縄戦が語るその実態／有事法制は、怖い』琉球新報社、二〇〇二年一月、二八頁、目取真俊『沖縄「戦後」ゼロ年』日本放送出版協会、二〇〇五年七月、二九～三〇頁）

四 「沖縄戦新聞」『琉球新報』二〇〇五年二月一〇日

うに受け止め、考えることができるだろうか。目取真俊の小説はこうした問いを読者に投げかける。

目取真俊「水滴」は、一九九七年一月に第二十九回九州芸術祭文学賞を受賞し、同年四月号の『文学界』に掲載され、七月に第百十七回芥川賞を受賞した^五。その後、『沖縄文学選』^六などのアンソロジーにも収録されているほか、高等学校での教材化も試みられている^七。目取真俊の代表作の一つである。

「水滴」の舞台は第二次世界大戦から約五十年を経た沖縄である。物語は六月の半ば、徳正の右足が突然膨れ、爪先から水が漏出するようになったことから始まる。身体の自由が利かなくなり、声も出せなくなった徳正のベッド脇には、夜になると深い傷を負った兵士たちが現われ、彼の足から滴る水を飲んでいく。徳正はかつて沖縄戦を体験しており、部屋に現われる兵隊たちは、徳正と共に米軍の艦砲から身を守るため自然壕に隠れ、取り残された死者たちであった。その中には同郷で師範学

五 本稿での引用は初出である目取真俊「水滴」『文学界』一九九七年四月号による。

六 岡本恵徳・高橋敏夫編『沖縄文学選 日本文学のエッジからの問い』（勉誠出版、二〇〇三年五月）

七 幸田国広「五十年の哀れ」と向き合う——『水滴』（目取真俊）教材化の試み——『日本文学』第四八号、一九九九年二月、三五〜四二頁、名嘉真恵美子「読みのレッスン 交感しない二つの世界——『水滴』の語りの構造から」（『月刊国語教育』第三三巻九号、二〇〇三年一〇月、一〇〇〜一〇三頁）

校に通い、共に鉄血勤皇隊に所属した石嶺もいた。敗走の途上で石嶺の水を奪って置き去りにした事実に向き合い、言葉を交わしたことを契機に、二週間あまり続いた徳正の症状は消えることになる。物語は徳正と死者たちとの、そして沖縄戦の体験／記憶との再会を軸としながら、妻のウシによる奮闘や、従兄弟の清裕が水を商売に使って失敗する顛末にも焦点を移し、一九九〇年代半ばの沖縄の姿を描き出している。

タイトルでもある水滴あるいは水は、生命活動に必須のものであり、特に戦場においては生死を分ける貴重な糧であった。また、飲用以外にも限りなく広範な用途に使われると同時に、多様な文化的意味をまとった物質である。たとえば、水は古代より砂と並んで時を計るために用いられた原初的な道具でもあり、水時計は砂時計と同じく重力を利用した時計として全世界的に利用されていた^八。

本稿では特に物語の錯時法に着目し、自明な解釈も含めて、小説中の水の意味と時間の関連を確認していく。そのことは過去に属する出来事である沖縄戦の記憶を、身体性を伴うものとして表現する小説的手法とも切り離せない。「水滴」では本来同居するはずのない時間が重層的に描かれており、一見幻想小説や夢物語のようにも読めるが、同時に鋭い現実感・臨場感を読者にもたらず。新城郁夫が論じているように、現実

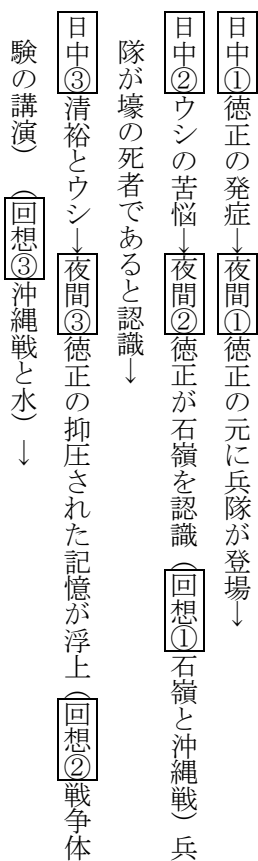
八 エルンスト・ユンガー著／今村孝訳『砂時計の書 時計と時間をめぐる文明論』（人文書院、一九七八年七月、三六〜三七頁）

と非現実、日常と幻想といった二項対立の区分を無効化する役目を担うのが、皮膚感覚を軸にした身体性なのである。

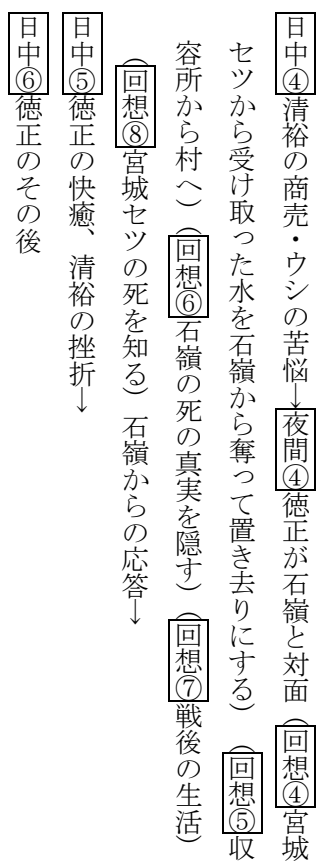
現在と五十年前の出来事とを描きながら、戦後という時間の意味を問う「水滴」は、水を用いながらどのような時間のあり方を表現しているだろうか。小説の構成や細部にも着目することを通して考察する。

二、小説の時間構成

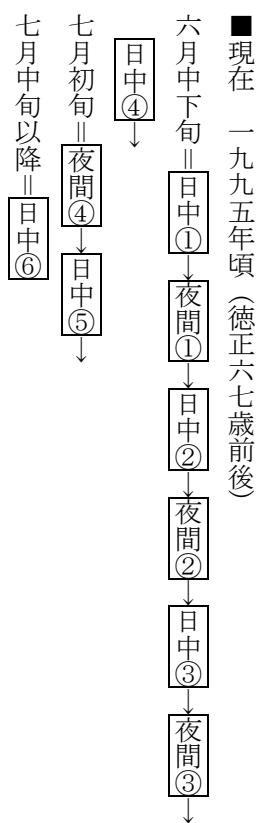
「水滴」の作中現在は一九九五年頃の六月中旬に設定されている。ここに半世紀前にあたる一九四五年六月から戦後にかけての出来事が、徳正の回想の形で挿入される。徳正の回想は主に夜間の場面で語られる。そこで、現在を日中と夜間（明け方も含める）に区分し、夜間になされる徳正の過去回想との三場面に分けて、物語言説の順に概要を記すと、次のように整理できる。（「↓」は時間の直線的な流れを指す）



九 新城郁夫『沖縄文学という企て 葛藤する言語・身体・記憶』（インパクト出版会、二〇〇三年一〇月、一三三―一三四頁）



ここから回想場面を抜き、物語内容の時間的順序に沿って時期ごとに整理すると、次のようになる。（なお、作中現在は一九九五年から一九九七年頃と推測されるが、厳密には特定できない）



これに対し、徳正の過去回想の場面で語られる、一九四五年の沖縄戦とそれ以後の徳正の体験を、物語内容の時間的順序に整理すると、次のようになる。（「↓」は前後の回想に時間的な重複があることを示す）

■過去 一九四五年（徳正十七歳）

四月から六月⇨回想①⇨回想③⇨回想④

八月以降⇨回想⑤⇨回想⑥

一九五七年まで⇨回想⑦⇨回想⑧

一九八五年頃⇨回想②

現在と過去に大別したとき、過去の中で特に多くの記述量が割かれているのが、一九四五年の沖繩戦と、一九八五年頃に開始された戦争体験の講演にまつわる事柄である。また、現在時を日中と夜間に区別したが、夜間には現在に過去が同居する。すなわち、夜間は単に徳正が過去を回想するのではなく、過去に死んだ兵隊が徳正のベッド脇に出現する時間帯となる。死者である兵隊は、徳正の想像力の中にしか存在しない亡霊や、病気・打撃・薬物などによる視覚障害がもたらす幻視とは異なる描かれ方をされており、生命体としての死者とでも呼ぶべき姿で登場する。彼らは今も血を流し、渇水感に苛まれている。村上陽子はこうした死者の身体性について次のように述べている。

「飢え渇く」身体を有することは、彼らが「欠落」を抱えてなお「生きて」いることを示す。兵隊たちは壕の中で、死にゆく身体を抱え

て水を求めつづけた。そしてその状態のまま身体に留め置かれ、いま・この徳正に回帰してきている。一〇

五十年前に戦死したはずの兵隊は、死んだ際の（あるいは死の直前の）状態で現われ、痛みやくすぐったさといった現実の感覚を徳正にもたらず。生者と死者が交流する点は夢幻能にも似ているが、「水滴」ではむしろ死者から生者への強制的な働きかけが大部分を占めており、言動を封じられた徳正は死者による収奪にさらされる。徳正は当初、彼らとの再会がもたらす何かを拒絶しようとするが、水を吸い出されることと呼応して次第に記憶を引き出され、過ぎ去ったはずの時間に直面するのである。そのため、回想は過去のある時点での体験を複数回なぞりながら、出来事の細部へと踏み込んでいく形を取る。

戦場で渴いたまま絶命したという過去の時間に属するはずの兵隊が、そのままの身体で現在に現われて水を求める。過去が現在に同居するこの事態がまず、「水滴」で特徴的な時間の表現である。

こうした死者の表現については、南米のマジック・リアリズムの影響が指摘されてきたほか、伊野波優美はグロテスク・リアリズムの概念を適用することの有効性を論じている^{二〇}。すなわち、誕生と死、若さと老

一〇 村上陽子『出来事の残響 原爆文学と沖繩文学』（インパクト出版会、

二〇一五年七月、一五四頁）

一一 伊野波優美「目取真俊「水滴」における「グロテスク・リアリズム」―

い、飲食と排泄、そして生と死といった、対概念の構図を用いた立場の表象を脱構築する役割を、兵隊は担っているのである。過去に死んだ者が絶命した身体を現わし、現在を生きる者と接触するという出来事は、論理的に成立しない時空間の同居、あるいは時空間の捻れとも捉えられる。そして、こうした現象は、徳正の爪先からしたたる水とともに到来している。徳正の足が膨れ、ウシが刺激したのを契機に水は噴出し、翌日には「一秒置きくらいに規則正しく落ち続け」る状態になる。時を刻む水滴は、秒針の動きのように物語言説の裏側で落ち続けるのである。

しかし、水滴はむしろ現在を過去と隔てていく線条的で一過的な時間の性質を拒絶する。そのことを示すように、足からの水滴の間隔はやがて不規則になる。夜間に兵隊が吸い出すことで、水は流れを歪められ、一時的に減少し、朝になって急激に噴出したりする。また、ウシによって草木に撒水されたり、清裕らによって服用されたりすることで、様々な時間の流れを生みだしていく。すなわち、草木の生長が加速されたり、人間が若返ったり、逆に老化したりと、生命活動の時間の流れに不自然な作用を及ぼすのである。

一方、多くの先行研究が指摘するように、水は徳正の記憶、特に罪悪感が具体化した物質と捉えられる。早くには池澤夏樹が芥川賞の選評において、水と罪悪感に加えて、時間との関連にも言及している。

——「沖縄文学」あるいは日本語の「対日本」文学——（『沖縄文化』第四九卷第一号通卷一一七号、二〇一四年一月、五八〜七二頁）

非業の死者の前では生き延びたこと自体が罪の意識を分泌する。それを敢えて清水で表現したことは、沖縄における水の聖なる性質だけでなく、過ぎ去って戻ってこない時間のあり方に異議を唱えるものであると捉えられる。三

「水滴」における水は、日常の感覚では過ぎ去った時間に属する身体や出来事の記憶を、現在に過去のまま招来する引き金の役割を担っているのである。

三、右足と水

「水滴」は徳正の足が膨れて水が滴り落ちるといふ奇病の発症から始まり、その病根としての記憶が徐々に開示されていく構成を取っている。しかし、作中現在の出来事を描く冒頭の一文には、すでに五十年前の時間と空間を暗示する要素が散りばめられており、先述した時間の同居表現を準備しているのではないだろうか。冒頭文を引用する。

徳正の右足が突然膨れ出したのは、六月の半ば、空梅雨の暑い日差しを避けて、裏座敷の簡易ベッドで昼寝をしている時だった。

三 池澤夏樹「芥川賞選評 誠意と技術」（『文藝春秋』一九九七年九月特別号）

まず、「右足」という設定である。近代医学では病因も治療法も不明な徳正の症状は、左足でも右手でも腹部でもなく、「右足」に表徴する。その理由は必ずしも明白にされないが、作中には過去に属する出来事すなわち回想や死者の身体についても右足にまつわる記述が見られ、両者を関連付けて解釈することを促す。

たとえば、徳正の部屋に兵隊が現われる最初の場面である。徳正が目にする先頭の兵は「右腕」に添え木を充て、次の兵は「右足」の膝から下が無く、三人目は顔の「右半分」が膨れ上がっている。そして水を飲み終えた彼らは「右側」の壁へと消えて行く。足に限らず、身体でも空間でも右側へと徳正の意識は誘われていく。繰り返される「右」という表象は、天満尚仁が指摘するように、徳正の内的必然性に基づく沖繩戦の記憶の痕跡と考えられる^{三三}。決定的と思われるのは、石嶺もまた、傷

三三 「意匠化された〈右〉」という表象は、徳正の物理的な足の痛み起源を持つている。つまり、〈右〉は語り手の恣意性によつて象徴化された記号の嵌め込みではなく、徳正の内的必然性に基づく〈沖繩戦〉の痕跡なのである（天満尚仁「単独性としての〈沖繩戦〉——目取真俊「水滴」論——」『立教大学日本文学』第一〇三号、二〇〇九年十二月、一三九頁）。スーザン・ブーテレイ『目取真俊の世界 歴史・記憶・物語』（影書房、二〇一一年一月、四三頁）も、右足の「変身」が沖繩戦の記憶の表象であると指摘している。

ついた腹部と「砕けた右足首」の姿で現れることである。石嶺以外の兵が去り、朝が近づく中で、徳正は兵隊の正体を意識化する。

とつくに気づいていながら認めまいとしてきたことが、はっきりとした形を取って意識に上ってくる。／兵隊たちは、あの夜、壕に残された者達だった。／右足の痛みがよみがえる。（引用文中の／は改行を指す。以下同様）

現在における右足からの出水という異変は、過去における兵達の負傷した身体（右足・腕・顔）を現在に同居させる事態をもたらす。そして、過去における自身の右足の負傷とその経緯へと現在を接続していく。

徳正が自らの右足負傷の記憶と向き合うのは、兵隊が現われる最後の夜（夜間④回想④）である。ここで徳正が沖繩戦で石嶺と別れた際の様子（夜間④回想④）である。ここで徳正が沖繩戦で石嶺と別れた際の様子が詳細に描かれる。戦時下、自然壕から水を汲みに出していた徳正たちは艦砲の至近弾に襲われ、石嶺は破片で腹を割かれて瀕死の重症を負う。なんとか壕に戻ったものの、伝令から南部への移動命令が伝えられ、動ける者と置き去りにされる者との間に対立が生じる。友情で結ばれていた石嶺を脇に、徳正の思考は降雨の中で混濁していく。

置いていかれるのを察知して助けを求める兵隊達の声と、叱りつける下士官の怒号が、淀んだ闇の中で絡み合う。荷物をまとめる音や

降り出した雨の音がそれに混じり合って、石嶺の横に座っている徳正の頭に反響した。何か大切なことを考えようとしているのに、いつまでもそれをまとめることができなかつた。壕は琉球石灰岩の小さい高い森の中腹にあつた。降りしきる雨は木々の葉にあたつて細かい霧になり、入口近くの岩壁のくぼみに隠れた石嶺と徳正の体に沁み込んだ。(引用文中の傍線は論者による。以下同様)

作中現在における徳正の水滴は、大学病院の医者に分析を依頼した大城によると、「要するに、ただの水ですね。少し石灰分が多いようですが」というものであつた。琉球石灰岩の小高い森の壕で、雨水が二人の体に「沁み込んだ」という描写からは、石灰を含んだ水が二人をつなぐと同時に、過去の時間に属するこの水が現在の徳正の身体に回帰していることを意味する。死者の身体だけでなく、水においてもまた、現在に過去が同居しているのだ。なお、鉄血勤皇隊や女子学徒隊が集めに走っていた水も、同様に石灰岩に触れた雨水や霧であつたと推察される^{一四}。徳正は自らの「巻脚絆」を石嶺の腹に巻き、彼を支えて壕に隠れていた際、同郷の宮城セツから水筒と乾パンを受け取る。しかし、徳正は石嶺に少量の水を与えたあと、我慢できずに残りの水をすべて飲み干し、彼を置き去りにしてしまう。

^{一四} 石灰分が多い点において徳正の水滴が沖繩戦の自然壕と結びつけられることについては、幸田国広前掲論文等に同様の指摘がある。

水筒の水を掌に受けて、白い歯ののぞく唇の間にこぼした。あふれた水が頬を伝わるのを目にした瞬間、徳正は我慢できなくなつて、水筒に口をつけ、むさぼるように水を飲んだ。息をついた時、水筒は空になつていた。水の粒子がガラスの粉末のように痛みを与えながら全身に広がつていく。徳正はひざまずいて、横たわる石嶺の姿を眺めた。闇と泥水がゆっくりと浸透し、もう起こすこともできないほど重くなつたように見える。壕の中の声が聞こえなくなつていた。空の水筒を腰のあたりに置いた。／「赦してとらせよ、石嶺……」／徳正は斜面を滑り降り、木々の枝に顔を叩かれながら、森を駆け抜けた。月明りに白い石灰岩の道が浮かび、倒れた兵が黒い貝のように見える。鱗が一枚一枚剥がれ落ちていく黒い蛇の尾が道の向こうに見える。その後を追って走っていた徳正は、死んでいると思つた兵の伸ばした手に引つ掛かつて倒れた。這ってくる兵の手を払つて立ち上がろうとした時、右の足首に痛みが走つた。置き去りにされる恐怖が込み上げてくる。徳正は足を引きずつて走り続けた。ふいに背後で炸裂音が響いた。森の中腹に立て続けに閃光が走る。米軍に発見されることを恐れ、徳正は走りながら、手榴弾で自決した兵士を罵つた。

水を奪って友人を見捨てた自身の行為を、徳正は戦後五十年を経てもなお誰にも打ち明けられない負い目として、意識下に隠蔽・抑圧することになる。

傷病兵にとってまさに命の水であった雨水は、一方で地面をぬかるませ、彼らの移動を阻む。闇と泥の中で人間が動物化していく様子が、「手足をもがれた両生類」（傷病兵）「黒い貝」（倒れた兵）「蛇の尾」「鱗」（移動する部隊と脱落する兵士）といった水辺の生物の比喩で表現されていく。戦争は、戦うことを止めて敗走し、絶命する人間をも容赦なく動物化してしまう。徳正も友情や自己犠牲といったヒューマニズムを剥ぎ取られた上で、「白い石灰岩の道」を走りながらこの泥水にまみれ、身体に沁み込ませたはずである。

徳正は耐えがたい渴きを癒やすために、結果的に石嶺の末期の水を半ば横領してしまった。それは同時に、石嶺を見捨て一人だけで逃げ切ることの決意でもあり、そのために必要な水分を補給したことを意味する^{一五}。徳正は石嶺に謝罪し、そのあと擬人化された森にまで叱咤されながら（「木々の枝に顔を叩かれ」）、罪の意識を抱えつつ駆ける。手榴弾で自決した兵士を罵るに至るまで、エゴイズムは加速する。死者の領

一五 「水の粒子がガラスの粉末のように痛みを与えながら全身に広がっていく」という描写は、安部公房「砂の女」（一九六四）における同様の表現を想起させるが、ここでは強い口渴感に占領された身体への急激な刺戟だけでなく、罪悪感による心情的な痛みも込められていることは言うまでもない。

域から遠ざかろうとする彼は、倒れた兵からすがりつかれ、その際に「右足」を負傷するのである。死者であると規定した「死んでいると思った兵」から不意に働きかけられた体験もまた、五十年前に死んだと思った兵隊が水を飲みに来る現在において再演されていると言えよう。

こうして、徳正の奇病が現われた「右足」は、石灰岩と雨水が入り交じった森の壕で、石嶺の水を奪い、石嶺や兵隊を置き去りにして駆けた際に、死者と見なした人間からの不意の接触によって、痛めた身体箇所にはかならないことが理解される。徳正の右足がそのあと重症化した様子はなく、やがて治癒したものと思われる。その右足が突如腫れ上がることから、小説は幕を開けているのであった。また、左右いずれのものは明らかでないが、徳正は「巻脚絆」で石嶺の腹部に応急処置を試みていた。足は徳正の沖繩戦体験にとって、石嶺の生死と強く結びついた身体部位なのである。

四、六月の半ば

小説の冒頭部に戻ると、徳正の右足が突然膨れ出した時期は、「六月の半ば」に設定されていた。この年は「空梅雨」であるとも記されているが、雨水が大地に降り注がないのと対照を為すように、徳正の足からは水が次々に滴ることになる。

六月中旬という時期に込められた意味に徳正と読者が直面するのは、兵隊たちが壕に置き去りにされた者であると徳正が認めてからさらに日

が経ち、しかしなぜ自分がこんな目に合わなければならぬのかという理由には向き合おうとしない時点である。

「いったん考え始めれば、この五十年余の間に胸の奥に溜まったものが、とめどもなく溢れ出すような気がして恐ろしかった」という徳正の思考は、胸や心よりも核心的な部位である右足に、「溜まったもの」が「溢れ出す」という水の縁語で表現される。徳正の思考は意識的な抵抗を破って徐々に五十年前の記憶へと近づいていくが、この際にも水が過去の時間呼び寄せ、あるいは現在時を過去へと遡らせていると言える。

時は石嶺との別れの場面へと遡っていくが、まずここで徳正が思い出すのは、「昼、教師に伴われて見舞いにくしてくれた小学生達のこと」である。徳正はこの十年来、六月二十三日の「沖繩戦戦没者慰霊の日」の前になると近隣の小・中学校や高校で戦争体験を講演するようになっており、本来であれば今年も今ごろは毎日のように講演に追われているはずだったことが記される。六月中旬とは、沖繩戦が終了したとされる日の直前にあたる時期なのである。

六月中旬に右足が膨れ、水がしたたり、身体不随に陥り、何より言葉を発せられなくなったという一連の出来事は、学校で戦争体験を講演しながら、右足を巡る自らの罪の記憶からは目をそらしていた事実と対応すると考えられる。スーザン・ブーテレイはこの点について次のように述べている。

いわば、徳正の変身は彼が語り続けている「嘘」に対する身体的な拒否反応であり、無意識の世界に閉じ込められている徳正の過去の（戦争の）記憶の表象なのである。^{一六}

学校で講演する際、はじめこそ「馴れない共通語はつかえ通しで」あったが、「相手がどういふところを聞きたがっているのか分かるようになるまでに巧みな話者となった徳正に、ウシは「嘘物言いして戦場の哀れ事語てい銭儲けしよつて、今に罰被るよ」という批判を向けていた。徳正は聞き手が期待する「戦場の哀れ事」を語ることで、自身を沖繩戦体験者＝被害者として定置し、一方で石嶺らに対する加害者性を隠蔽することで、講演料を得ていた。しかもその金で飲酒して忘却と抑圧に拍車をかけ、酒という「水」を腹に溜めて醜く太っていった。徳正が奇病とウシの言葉を通して直面させられるのは、まず戦争体験の語りをめぐる自己批判なのである。そして、徳正が動けなくなった「裏座敷」や、兵隊が現れる夜の闇に象徴されるような無意識下において、「嘘物言い」に耐えられなくなった徳正の罪悪感が、発話と動作を禁じる症状として表徴しているとも考えられる。

芥川賞選評で日野啓三がいち早く指摘していたように、「水滴」は一九四五年のエゴイズムだけでなく、戦後五十年余りに渡って被害者とし

てのみ戦争と自分を装ってきた、沖縄に限定されない日本の戦後の自己欺瞞を問い直している^{一七}。徳正は戦時下に石嶺の水を奪って置き去りにしただけでなく、戦後その事実を隠蔽した語りによって私腹を肥やしてきた。だが、彼は水に身体を占領される症状を通じて、戦時下と戦後、二つの時間に裁かれることになるのである。

小説で明確に描かれているわけではないが、徳正が発症した日や、石嶺が出現した夜が、ほかでもない五十年前のあの日、すなわち徳正と石嶺が別れた当日である可能性はある。しかし、むしろ明確な日付が示されない点も重要と考えられる。時間に区切れはないし、ある日に特別な意味付けが為されるには様々な政治的要因が関わっており、そのことと個人の体験が一致するとは限らない。沖縄戦終結の日とされる一九四五年六月二十三日にしても、気を失って波打ち際を漂っているところを救われて米軍の捕虜になった徳正にとって、何かの区切りとなる特別な日であったとは言えない。石嶺を置き去りにして以降、戦後の回想は数年の時間を一気に飛んで語られるが、そこには一九四五年八月十五日という区切りすら示されていないのである（回想⑤〜⑧）。

先述したように、徳正の「嘘物言い」は沖縄戦の終結日とされた沖縄戦戦没者慰霊の日に合わせた講演の中で行われていた。それに比して、徳正の奇病は慰霊の日や講演を妨害するようなタイミングで発症し

一七 日野啓三「芥川賞選評 大肯定」『文藝春秋』一九九七年九月特別号、四二六〜四二七頁。

ているばかりか、むしろ冬瓜の成熟や仏桑花の開花、そして梅雨（空梅雨）といった、水と関わり深い自然現象と呼応して現われている。

スーザン・ブーレイは、「水滴」における徳正の生々しい戦争体験が、沖縄県民たちは身を挺して祖国のために戦って散ったのだとする「戦争神話」と対照的なものとして描かれていることを指摘している。一九四五年六月二十三日や同年八月十五日に戦争が終わったとする共通理解も、特定の立場から設定された政治的な言説に過ぎない^{一八}。徳正の発症に関する日時をめぐる描写は、国民国家が紡ぐこうした神話あるいは物語の時間から逸脱した表現として捉えることができるのである。

徳正は先ほど引用したウシの警句を頭に浮かべながら、ある兵隊のまなざしに気付き、水を持ってくると約束しながら果たせなかった記憶に出会う。徐々により核心的な記憶＝病根を探っていく途上であって、徳正は「自分がもう一度あの壕の闇の中に引きずり込まれていくような気がした」と感じるに至るのである。

一八 佐藤卓己『八月十五日の神話——終戦記念日のメディア学』（筑摩書房、二〇〇五年七月）は、メディアの作り手と受け手が、如何に終戦の日を戦前と戦後の断絶点として構成してきたかを分析している。目取真俊は前掲『沖縄「戦後」ゼロ年』でも、「戦後」という言葉が様々な事実を無視することで——たとえば自衛隊の海外派兵や、沖縄から爆撃機が飛び立ったベトナム戦争、日米安保体制の負担を沖縄に押しつけてきた経緯——成立していることを論じている。

ここでは、過去を回想する、または記憶が甦る、といった常套句では表せない事態が生じている。冒頭で描かれた「裏座敷のベッド」は、そのまま沖繩戦における自然壕へと転換・変貌する^{一九}。そして、かつて身動きの取れぬまま壕に取り残された兵隊たちと同じように、今度は徳正の方がベッドに置き去りにされるという構図が浮かび上がることになるのである。

五、水の行方と沈黙の領域

目取真俊の初期短編「平和通りと名付けられた街を歩いて」では、天皇の戦争責任が不敬表現によって直截的に問題化されていた^{二〇}。これとは対照的に、「水滴」では戦争や戦争を引き起こす国民国家への批判は前景化されていない。徳正は自身を戦場に置き、友人の水を奪い置き去りにせざるを得ないような状況に追い込んだもののへの批判を示さない。「セツを死に追いやった連中を撃ち殺したかった」との怒りはあっても、「連中」が具体的に誰であるかは追及されず、「同時に、自分の中に、

これで石嶺のことを知る者はいない、という安堵の気持ちがあるのを認めずにはおれなかった」と、石嶺の死をめぐる個人的な罪の隠蔽へと意識を奪われていくのである。名嘉真恵美子は、こうした徳正の態度について次のように述べている。

戦争で負った罪は彼の中で自閉したままである。自閉し、やがて溶解していくのであろうことが徳正やウシの姿から予想される。「…中略…」戦争という巨大な力への相対化の視線を持たされない徳正の苦しみと悲しみに終わりはない。個人への圧倒的な力を及ぼす戦争という巨大な悪を問う認識なしには、真の贖罪もあり得ないと思うからである。^{二二}

しかし、徳正にとっての罪悪感を伴う沖繩戦の記憶が水に表象されているとすれば、小説は少なくとも二つの描写を通して、自閉し溶解するのは違った可能性を示していると考えられるのではないだろうか。

まず、徳正の水は、ウシや清裕によって裏庭に撒かれていた。小説の末尾で徳正は、その裏庭に下りる。

一九 武田泰淳の小説「ひかりごけ」（一九五四年）にも、戦後の法廷が戦前の洞窟に変貌する場面があり、戦中と戦後という時空間の連続や重なりが表現されている。

二〇 友田義行「目取真俊の不敬表現——血液を献げることへの抗い」（『立命館言語文化研究』第二巻四号、二〇一一年三月、一五三〜一六五頁）。目取真俊の短編小説「二月七日」（『新沖繩文学』第八二号、一九八九年二月）でも、天皇制への告発が強く前景化されている。

二二 名嘉真恵美子前掲論文、一〇一・一〇三頁

腰のあたりまで伸びた雑草の勢力にあきれながら、ハブがいなか
棒切れで草の根元をあちこち叩いた。何か固い物に当たって棒の先
が跳ね返った。草を薙ぎ払いながら進むと、仏桑華の生垣の下に、
徳正でも抱えきれそうにない巨大な冬瓜が横たわっていた。濃い緑
の肌に産毛が光っている。溜息が漏れた。軽く蹴ってみたが動きも
しない。親指くらいもある蔓が冬瓜から仏桑華に伸びている。長く
伸びた蔓の先で、黄色い花が青空に揺れていた。その花の眩しさに、
徳正の目は潤んだ。

ハブを警戒する内に探り当てられた、「濃い緑の肌に産毛が光ってい
る」と描写される冬瓜は、小説の冒頭で「中位の冬瓜ほどにも成長した
右足は生っ白い緑色をしていて、ハブの親子が頭を並べたような指が扇
形に広がっている。まばらな脛毛が卑猥な感じだった」と描写される徳
正の足と対応関係を成す。容易に破壊できそうにない固さ、「抱え切れ
そうにない巨大」さ、「軽く蹴ってみたが動きもしない」重量をもって
徳正の前に現われるのは、自分の身体と同じく水Ⅱ記憶を抱えた、右足
としての冬瓜である。冬瓜は循環する季節の中で、毎年夏にかけて水を
豊潤に含んで生育し、徳正宅の裏庭に横たわるだろう。それは沖繩戦の
記憶が、徳正の無意識的領域に時間を凍結して潜在し、繰り返し回帰す
ることを示唆するものである。

また、一方で徳正から横領して商品化された清裕の「奇蹟の水」は、
生体時間を逆行させる若返りの効果を失い、逆に加速させる老化の効果
を持った「腐れ水」に変貌する。清裕は抗議に殺到した群衆から袋たた
きにされるが、その際に肝心の水はどう扱われただろうか。

髪がまばらに禿げ、頬や首の皺が三重に垂れた女が、ステンレスの
水筒を三本手にしてタクシーの上によじ登り、何も知らない人々の
上に水を振りまいて大声で笑った。人々の足の間を転がって川に落
ちたもう一本の水筒は、海に向かって漂いながら、タクシーや駆け
つけたパトカーを引つ繰り返して荒れ狂う群衆に、朝の光をちらち
らと反射していた。

この結末は、「戦場の哀れで儲け事しよると罰被るよ」というウシの言
葉が、徳正の戦争体験講演と相似形を成すようにして清裕に実現したも
のとも捉えられ、小説発表時から安易な寓話として批判されてきた^{三〇}。
だが、語り手だけが認識している後半の描写に着目したい。喧噪の中、

三三たとえは、「けれども反面、その水には育毛や強精の特効が現れ、従兄
弟がそれを世間に売り出して、大儲けする段取りになると、寓話性が強まる。
まして最後に水が効力を失い、従兄弟が群衆に制裁をうけるに至っては、寓
話性がきわめて濃厚になり、つくりが目だつ。小説は寓話ではない」との選
評がある（田久保英夫「芥川賞選評 小説の仕立て」『文藝春秋』一九九七
年九月特別号、四二七〜四二八頁）。

水筒に入れられた水は、人知れずどこかへと旅立とうとしている。石灰岩に降り注ぎ、セツから徳正に渡された水は、時間を超えて徳正の身体に蓄積され、足からしたり落ち、清裕によって再び水筒に詰められ、海に向かって漂っていく。ここには、沖縄戦での個人的な記憶＝水が、今も時間を封印したまま海を旅し、思いも寄らない機会に出現するイメージが込められてはいないだろうか。

冬瓜と水筒に封じられた水は、同時に、大地と海に解放されたとも言える。不意に出現し、噴出する可能性を秘めた水は、記憶を現在時に繰り返し到来させることを予感させる。それは徳正個人にのみ再来する自閉した罪の意識というよりは、むしろ偶発的な邂逅／遭遇を求めて彷徨う、開かれた沈黙とでも呼ぶべきものとして捉えられる。すなわち、徳正の「嘘物言い」の陰に秘められ、読者にのみ開示された、語られざる沖縄戦体験である。それは小説に向き合う読者へと送り届けられ、「戦争神話」^{二三}や「過ぎ去った悲しい物語」^{二四}といった表層に覆い隠された、沈黙の領域が存在することを示唆するのである。

六、終わりに

戦争の記憶は時間が経つにつれて現在から遠ざかり、忘却されたり、定型に押し込まれたりする。一方で、肉声や手記、遺品を含む物品や施

設、場所、そして身体など様々なものが、戦争体験の忘却に抗し、触れる者に新たな触発を及ぼしていく。「水滴」は、博物館で展示されたり記録されたりすることもない(できない)「水」が、身体や自然を通して様々な形で回流する物語によって、沖縄戦の記憶を表象しているのである。ただ、冬瓜は徳正の自宅の裏庭に生っており、どこかへ流通することは前提とされていない。また、海へと漂い出る水筒も、誰かに届く物などではなく、封印されたまま行方不明となる個人的記憶を象徴しているとも取れる。

むしろ、村上陽子が述べるように、歴史という集合的記憶からは語られない個の記憶としての徳正の物語は、「濃い緑の肌」に包まれた冬瓜として閉じ、「いつほとばしるともしれない記憶をその内部にはらんで現前する」^{二五}ものと捉えることもできる。村上はまだ、「他者の記憶について考え、表現することは、他者の傷みに接近し、共振する試みにほからない」と述べ、「記憶が不可避的にはらんでいる共有不可能性、表象不可能性を、「語られない」というかたちでくりかえし描きつづけているのが目取真俊という書き手である」とも論じている。

作中世界の誰にも開示されない徳正だけの記憶と体験に、「水滴」の読者は触れ、共有不可能なはずの出来事に突き動かされる機会を得る。冬瓜に触れるのも、水筒を開けるのも、ほかでもない読者である。小説の

二三 スーザン・ブーレイ前掲書、四三頁

二四 新城郁夫前掲書、一四二頁

二五 村上陽子前掲書、二六一頁

最終文で描かれる水滴、すなわち、乾くことも流れることもなくその場に揺らぐ徳正の涙（潤んだ目）が、徳正や兵隊と同じ体液を滲ませる身体を持った我々読者のものでもあると実感すること。目取真俊の小説は、村上陽子が「共振」と名付ける反応を読者から引き出す要素に満ちているのである。

最後に、「水滴」の教材化について触れておきたい。「水滴」を高等学校の文学教材として扱った幸田国広は、この小説が戦争の記憶を一方から一方への垂直な関係において語り継いだり教えたりするものではなく、「学習者にとっては戦争を扱った文学とのこれまでとは違う「出会い」が期待できる」と述べている^{二六}。幸田が暗に批判する従来の戦争教材には、本論でも先行研究でも繰り返し指摘のあった、戦争を過ぎ去った悲話として捉える定型的な物語や、国民国家に代表される共同体によって共有された歴史が含まれていると推測される。

「水滴」の教材化にあたっては、言うまでもなく、戦争の歴史について学ぶ素材に終わらせるべきではない。むしろ、歴史教科書で示されるような正史から逸脱する沈黙の領域の存在を、「水滴」は示唆している。そして、他者と共有されることも表象されることもない出来事を、言葉で表現するという困難に、様々な小説的方法を用いて挑んでいるのである。

水の回流をモチーフにして時間の様態を操作し、過去に属するはずの個人的な体験の記憶を、身体を回路にして現在と他者に回帰させること。そうすることでしか表現されない沈黙の領域に、心身を震わせる体験こそ、特筆すべき教材的意義となるはずである。

二〇一七年 七月 四日 受付
二〇一七年 九月 二日 受理